

第24号  
Vol.8-3  
2012年1月1日

# Dari Kuching

## アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人播泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-64-21-7864 E-mail: [kenky@tm.net.my](mailto:kenky@tm.net.my)



### 太陽の恵みとともに… 日々がある

撮影者 中澤 和代

笑い声に包まれるのは気持ちが良い。屈託のなさに安心感が醸される。それ程の理由もないのに何でも笑顔につながる。これは初めからあったものではない。知らず知らず「ムヒバ」の空気が出来てきた。専門性も技術も関係ないところで、「ムヒバ」の人たちが変わってきている。表情も行動も、何より人との関係も。最近気づいたのだが、この太陽のような空気が「場」をつくっているのだ。場の空気は人を変える。人は結

局変わらない、というのは思い込みだったようだ。確かに非難や注文、あれは駄目、こう変われ！と言われても人は変わらない。言われずとも、明るい空気と優しさに包まれたら、受け入れられていると分かったら、自ずとそこに絆が生まれる。それで人は変わるらしい。お荷物みたいだった人が役割を果たす。益々持ち味が出てくる。あの人も、この人も、スタッフも。人は結構短い間に変ると実感するこの頃である。

2011年、恒例の“今年の漢字”は「絆」だとか。「失」や「憤」でも不思議でない大変な年だったのに、暖かい信頼の言葉「絆」になった。多くの人たちが、前向きに心と心をつなぐ「絆」に願いを託した。新しい年に希望が湧いてきた。大きな試練を超えて、家庭にも地域にも「笑い声」と「絆」を！  
今を生きる私たちお互いが、利己や単純な分担ではない、差別し合わない本当の「絆」を育てられたらと、心から願っている。(健)

## ブルネイでマレーシアと日本を考える

ブルネイ・ダルサラーム大学 大石 幹夫



ガドンの夜市で売られているブルネイのお菓子(クエ)

去年の10月から、ボルネオ島の北にある小国ブルネイに住んでいる。ここには、三重県くらいの国土に40万人(ニュージーランドのクラストチャーチと同じくらい)の人々が住んでいる。自然がよく保全され、森(=ジャングル)の中にオフィスビルや住宅が点在する風景はとても美しい。

ブルネイは日本にとってもアジアにとってもあまりなじみのない国だと思う。一般的に知られていることは、世界一金持ちのスルタンがいて、石油と天然ガスのおかげで国庫が豊かで、住民は税金を払う必要がないということくらいだろうか。私は、隣のマレーシアには合計して10年ちょっと住んだが、私もブルネイに来るまでこの国に対してこれくらいのイメージしかなかった。私の妻は中国系マレーシア人だが、彼女もその親せき一同もこれと同程度だから、マレーシア人一般ですら、ブルネイのことはあまり知らないと思う。マレーシアとブルネイを比較すれば確かに共通する部分が多い。マレー系の人たちが多数派を占め(マレーシアよりもその割合は高い)、中国系もインド系もいる。従って文化も衣食住もマレーシアと似たり寄ったりではある。それで、マレーシアとの付き合いが長い私にとってブルネイでの生活を始めるにあたり、違和感やカルチ

ャーショックのようなものは全くなかった。ただ、細かなところでマレーシアとの違いはいろいろある。すぐわかる違いは、マレー人の村落(カンボン)に建てられている住宅が豪邸ばかりなこと、人々の車の運転マナーがいいこと、バイクに乗っている人をほとんど

見ないこと。食べ物では、スパゲッティとディムサム(点心)がなぜか民族を問わずとても人気があること、マレーシアでもおなじみのナシ・レマに加え、ナシ・カトックというブルネイ独特の「包みご飯」(タ・パオ)があることなど、些細な点の違いも面白い。それに驚くことに、ブルネイではイスラム教徒ではないマレー人もいる。つまり、マレー人の定義がマレーシアとブルネイとで違う。

一方、テュドン(ベール)を被っている女性が大変多いことは、この国の宗教の現状を考えるうえで興味深い。実際、この国のマレー系のイスラム教徒の女性のほとんどがテュドンを着用していることは、マレーシアが一時期のイスラム・リバイバルブームが下火になり、風俗・文化上「何でもあり」のような状態に戻ってきていることと対照をなす。ブルネイには、Malay Islam Beraja(略してMIB:マレー文化とイスラム教と絶対王政がこの国の柱となるという考え)という国家イデオロギーがあり、政府部局の熱心な活動で、これがブルネイの隅々まで浸透している。マレーシアにも Rukun Negara(国の原理)という国家イデオロギーがあるが、最近あまり言われなくなった。ブルネイでこのMIBが強く推進されているのはこの国の規模と地政学的な条件に

よるところが大きいと思う。三重県ほどの領土とクライストチャーチほどの人口を擁し、北に面する南シナ海を除き、三方をマレーシアに囲まれているブルネイは手をこまわしていればマレーシアの一部になり、首都のバンダル・スリ・ブガワンはその一地方都市になりかねない。実際、かつてはボルネオ島からミンダナオ島にかけて広い地域に広がっていたブルネイのスルタン領は、西欧列強の進出、とくにサラワクのクチンを本拠とした「白人酋長(White Rajah)」たちにより領土を削られていき、現在では、介在するマレーシアのリンバン地区により国を二分される状態にまでなっている。マレーシアからの同化吸収の圧力に抗するには、「ブルネイの魂」としての強い国民アイデンティティの形成と維持が不可欠となる。そのことがブルネイ人の女性イスラム教徒のテュドンにも反映していると感じる。このような隣国マレーシアとの関係からくる緊張はあるが、恵まれた地下資源から得られる富の国民への分配により、ブルネイの人々は優雅なゆったりした生活を楽んでいる。ここは政府のお金を中心に回る経済だ。資金が、公務員への手厚い給付、都市計画、街並み景観、公営住宅の建設などを通じて潤沢に回るシステムだ。かつての日本の地域経済もこれに似たようなところがあったように思う。お金の出所が、地下資源か国民の貯蓄と税金かの違いはあるが、日本が構造改革を経て、かつての分厚い中間層がほぼ消えてしまった今、人々の幸福を実現する方法として、ブルネイ流も参考になるのではないだろうか。「日本に今も残る正味資産300兆円をブルネイの石油と同じく人々の生活を向上させるために使えないか?」と想像(妄想)したくなる。

# 大好き福島を守るために —東日本大震災で得たこと—

ベナン在住  
田中 絹代

私の生まれ育った福島県伊達郡保原町（現伊達市保原町）は、「桃の里」とも呼ばれ、桃を中心に果樹栽培が盛んなところです。四方を山に囲まれ、冬には「吾妻おろし」とよばれる吾妻山地からの冷え切った風が吹き降ろしますが、春には桃の花で一面ピンク色に染まり、夏から秋には果実や稲がたわわに実り、自然に恵まれた地域です。山間には、いくつもの源泉があり、各地で和太鼓など伝統的な文化が継承されています。町内会や婦人会、育成会などの集まりもいまだに盛んで、子どもの数はずいぶん減ってきたけれど、まだまだ地域住民同士のつながりが強い地域でもあります。

福島の高校を卒業したあとに地元を離れ、作業療法士となり、青年海外協力隊としてマレーシアに来て、その後マレーシア人と結婚した私。そんな私が、夫や子どもをつれて実家に里帰りするたびに近所の人たちが、りんごや桃などを携えて遊びに来てくれます。離れてみて初めて分かる故郷の良さ。そんな私の故郷が、3月11日の東日本大震災の大きな被害を受けました。

「福島＝原発事故・放射能汚染」マレーシアの新聞やテレビでは、原発事故のニュースを大きく取り上げていたものの、原発事故が起きた地区は、実家から70kmも離れた場所で、家族も通常の生活に戻っているといったので、原発事故については、楽観的に考えていました。しかし、震災から1ヵ月後、地震の影響で母親の精神状態が良くないとの連絡を受けて一時帰国をした私は、原発事故が想像以上に私の故郷に大きな影響を与えている事実を知ることになります。

「福島から嫁はもらうな、そんな風に言われてるんだ」と、叔母が私に告げました。生まれつきの障

がいがある息子を持つ私は、「妊娠中に何か悪いことをしたんだろう」、「出生前検査は受けなかったのか？」とマレーシアの人に何度も言われました。「人権侵害も甚だしい」と怒りを覚えました。結局、日本も同じ。障がいを持った子供たちが生まれてくることを恐れ、それを避けようとする。それは、まだこの社会が障がいを持った子どもとその家族にとって、生きづらい社会であるという証拠。そんな怒りにも似た思いを抱いたままマレーシアに戻ってきて数ヵ月後、降町（現在は同じ伊達市内）に嫁いだ妹の住む地区で高い放射線量が計測され、小さい子どもがいる妹家族にも避難勧告が出され、市内の別の場所に引越したという知らせが入ってきました。

12月初旬、二人の息子を連れて、福島に里帰りした私は、原発事故の影響がさらに大きくなっている印象を受けました。姪や甥の通う幼稚園では、子どもが別の地域に避難し、児童数は半減。幼稚園児は、みな放射線量を計測する機器を首から掲げています。予防はもちろん大事だけれども、「福島から嫁はもらうな」と言わせてしまう気持ちを変えない限り、福島の子どもたちはずっと不安を抱えたまま成長していかなければなりません。姪や甥たちが、安心して成長していけるために私に何ができるのか、大きな課題を突きつけられた思いです。私の故郷では、原発事故によるもう一つの問題がおきています。若妻会とは名ばかり、地区の60歳以上のお嫁さんたちとの日帰り温泉旅行から戻ってきた

30歳代の妹は、ボツリとこういいました。「私の家は小さな子どもがいるから避難対象になって補償金がもらえる。だけど、お年寄りばかりのところは、避難対象にならないから補償金は出ないんだよね…。一緒に温泉行ってきただけど、なんか気まずくてさ…。放射線量が少し違うだけで、家族構成が少し違うだけで、同じ地域に住んでいながら、補償金が出たり出なかったりするということです。「それに、除染が済んでも、あの場所に住んでいる限り、息子に嫁が来ないんじゃないかと思うと、あそこを引き払うことも考えるよ…」原発事故とその後の補償問題によって、地域社会が、分断・破壊されようとしているのです。福島が本当に復興するために、乗り越えなければならない二つの大きな課題。豊かな自然、強い絆が残る地域社会を守るために何ができるのか。放射能汚染の後世への影響を最小限に食い止め、それでも生まれてくるであろう障がいを持った子どもたちが安心して暮らしていける社会にするために何ができるのか。大好きな故郷である福島を守るためだけでなく、世界中にいる障害を持った子供たちのためにもできるだけ多くの人と一緒に考えていければと思います。



福島の桃畑 5年前のアルバムより



中澤 和代

「ブルネイ王国」、読者のみなさんは、その語感からどんな印象をもたれるでしょうか？

この国は、ボルネオ島の西北部に位置し、北側は南シナ海に面しており、陸地の三方は、複雑にマレーシアに囲まれています。れっきとした独立国です。広さは我が故郷、徳島県の1.4倍、それなのに人口は約半分という、つまり人口密度の低い土地です。税金がなく、教育費も無料。ASEANにも国際連合にも加盟しているとのこと。

8月28日、ハリラヤブアサのオープンデー（宮殿の王様と握手できる日）を目標に、私たちはマレーシア国内のミリに向かった。ブルネイへの行き方は、いくつかありますが、今回は日本から来てくれた友人とミリ空港で落ち合い、シブの中国系の友人から教わった方法（乗り合いタクシー）で約1時間、イミグレーションも無事通過し目的のホテルに辿り着きました。

石油など、自国の豊かな資源があり、お金持ちの国と言われるだけあって、ブルネイに入った途端、整備された道路と美しい建物。空はどこまでも青く、イスラム寺院がそびえ、南国の花々が咲いていました。私たちがホテルの近くを散歩していると、衛兵が4、5人たむろしており、これが王宮だと気づくのに時間はかかりませんでした。衛兵のおじさんがニコニコしながら何枚も写真をとってくれるのには驚き、思わず日本の皇居を思い浮かべました。おじさん情報によると、オープンデーは、31日とのこと。残念ながら、私たちの旅程外なので、王様との握手はあきらめることに。

翌日、今日一日をどうしたらよいかホテルバスの運転手さんに相談すると彼の友人を紹介してくれました。是非、訪ねて見たかったのはミュージアム、けれど、本日休館日。よし！とばかりに白タクのおじさんは「すごいところに連れて行ってあげるよ」と…。行ったところは、ブルネイで最高と言われている「エンバイヤホテル」でし

した。おじさんの後をついて、ホテル建物内と庭園を通り抜ける。その都度「どうだ！日本にはこんなのあるか？（ないだろう！と言わんばかり）」を繰り返す。そりゃ、確かにすごい。どうも王様の直接経営であるこのホテルの豪華さが彼の誇りであるらしい（日本の「ホテルオークラ」の庭園もすごいし、買ったことはないがホテル内部にブランドショップも並んで華やか、「帝国ホテル」のレストランだって味はいいはず、そうそう横浜のみなどみらいには、すごい高さの豪華ホテル（何という名だったっけ？）口には出さねど、対抗意識むんむんの私。おじさんに「日本にもたくさんあるよ」とキツバリ答える。「じゃ、プライベートビーチに行こう！」とまだ取こうとする白タクさん。とうとう我慢ならず「私たちはホテルなんかじゃなく、水上生活集落（ブルネイ川カンボン・アイール）に行きたい！」と伝えた。「あ、そうなの。じゃ、連れて行くけど、あんたとこ行きたいの～」という風情。横から夫に「君、このホテルはすごいね、って少しは言うべきだよ、彼の自慢なんだから」と注意されてしまった。そして数分、白タクさんは、あちこち電話してボートの持ち主を捜し出してくれた。アリガトウゴザイマス。その後が冒険。ゆらゆらゆれる小さな5人乗りの裸ボートに乗り込み、水しぶきをあげながらの1時間あまり。これでも川の中？と思う程大きな家がぎっしり！学校もいくつも見た。警察、商店、ガソリンスタンドも水上にある。電気や水道も整っているらしい。行けども行けども水の上（

中？）に村がある。極めつけは、水上高く大きな液晶パネルでTVコマーシャルが放映されていたこと…。ぐるっとまわって、「あそこがモスク、あそこが王宮」と白タクさんはとても親切。「おじさん、いいね！」と私。王宮の裏側かな？いや、水上生活者から見たら表かな？と興味は尽きない。これら水上生活者の人口割合は、首都人口の4分の1（約35000人）とのこと。人々の職業は？と聞けば、「地上に通う公務員もたくさんいるよ。ほら、車がたくさん止まってるだろ？」と道路端の駐車場を示される。また、「水上の村にもいろいろ必要な仕事があるんだよ」と説明してくれた。白タクおじさんは、契約時間をもとせず、食べ物のおいしいナイトマーケットなどを案内してくれるのでした。

この国にも障害をもつ子どもはいるであろう、その子たちはどうしてる？おじさんの給料は、800ブルネイドル（シンガポールと同じ価値）というけれど、(GDPから推察すると？等々、知りたいことはふくらむばかり…。王族はすごい収入で、国民が不自由なく暮らせる配慮をしているから、みんな幸せなのだろうか。ずっと平和で反乱などはないの？結局、私たちの関心は、その国の美しさや食べ物だけではなく人々の暮らしぶりを身近なところまで引き寄せて体感するところにあると気づかされた旅でもありました。でも、来年のハリラヤに、もう一度行きたいなあ…。

この旅を終えて後、夫の知り合いがブルネイの大学で教鞭をとっていることを知り、今号に執筆していただきました。合わせてお読みいただけて幸いです。



水上生活集落の一部（川の色はサフワクと同じミルクコーヒー色でした）

## ACSだより ベナン在住 内海 明美

☆☆☆ Dianaさん結婚☆☆☆



挙式当日の二人

2011年11月12日、ACS Stepping Stone作業所の利用者Dianaさんが結婚しました。ご主人はマレーシア半島の北部、タイ国南部と陸続きのペルリス州にある製氷会社に勤務するZulkefliさんです。

Dianaさんが、友人の家を訪問していたときにそこに彼もいたということで携帯電話の電話番号を交

換し、電話交際が始まりました。

その後、クアラルンプールのUnited Voice (知的障害者の本人の会) 会員の男性がDianaさんに交際を求めたのを機にZulkefliさんも積極的にご自分の気持ちをDianaさんに伝えられたということで、婚約式(約1年前)を経て、結婚式となりました。

イスラーム教徒者の結婚式はモスクでイスラーム教の聖職者の立会いの下、結婚を承認され、女性側、男性側で2回結婚披露宴を行います。これまでDianaさんが共に住んでいたお姉さん一家の地域の人たちがgotong-royong (ゴトロン・助け合い) で食事作りを引き受けて、客人をもてなし

ました。ACSのStepping Stone作業所の利用者、職員、ボランティアもお祝いに集い、緊張して笑顔が作れない2人にスマイル、スマイルと声をかけていました。花嫁側ではKumpang (マレー系の人たちのタンバリンのような打楽器) を打ち鳴らして花婿が登場するとSilat (マレー系の人たちの武芸) で他村出身の花婿を受け入れる式がありその後、家族、親戚、友人たちからの祝福を受けました。2人はお揃いのクリーム色の結婚衣装で、何時もはスッピンDianaさんでしたが、この日はしっかりと化粧をした美しい花嫁でした。

結婚後はDianaさんはご主人の住むペルリス州に住むことになりました。そのため、Stepping Stone作業所を退職しました。おふたりの未来に幸あれと願います。おめでとうございます。



## RCSはいま 中澤 和代

☆☆ 新メンバー紹介 ☆☆

5歳の女の子(キャサンドラ)が11月から通いはじめました。両親はMehillahセンターの前の道路をかなり奥に入った村の小学校の先生をしています。

面接に来た時、両親と私たちが話すテーブルの上にキャサンドラは、自分の場所を確保しました。退屈そうなので、いくつか、おもちゃを与えてみましたが、集中力はあまりない様子で、おもちゃには関心を示さず、ひたすら母親にまとわりつき、時に、誰かが歩みよると、いきなり腕がぶつと噛みつく、平手でたたく、という具合でした。愛くるしい目をした女児ですが、一連の動作は素早く、他人を受け容れない特徴が目立ちました。実は、私も噛まれた一人。受け容れられなかったこと、実際の傷、その両方が心に残る痛みとして、印象的でした。

その後、約2ヶ月、Mehillahセンターに通ってくることを嫌がる様子は、ありません。仲間がいるのが楽しいのか、嬉々として、みん

なのあとをついてまわり、飽くことなく遊んでいます。彼女なりに好きなスタッフや仲間を選び、彼女の思いに沿って遊んでいる限りは、コミュニケーションもとれるし、大丈夫です。排拒も言葉で伝えられます。が、まだ集団行動には馴染まず、学習時間にみんなと同じ場所に座らせていると、彼女から素早い攻撃の手が動きます。Mehillahセンターのメンバーたちは、みんな優しく、そんな彼女を余裕たっぷりの暖かい眼差しで見つめ、遊んであげています。

当分の間は、マンツーマンの療育が必要だと感じています。いつか、こんなことがきつと笑い話になることでしょうか。

そのキャサンドラ、毎日、きっかり1時30分頃になると机に突っ伏して、シクシク泣き出すのです。それはお母さんが2時にお迎えに来るからなのです。お母さんに「帰りたくない」と駄々をこねるキャサンドラ…。自分を守る攻撃力を駆使しながらも、仲間たちと賑

やかに過ごせるのが彼女の幸せなんでしょうか。そして、何故か、私たち一同、そんなキャサンドラを見て、胸キュン、Happyになつてしまうのは、お母さんに対して申し訳ないかしら？



ロシタ(左)とあそぶキャサンドラ(右)



毎日繰り返される帰り際の拒否状態

# じゃらんじゃらん ちゃりがわん♪ (24回)

## 竜が落ちていった子？

上杉 誠

明けましておめでとうございませす！色々なことがあった昨年ですが、今年は良いことがいっぱいの方にしていきたいと思います！

さて、今年2012年は辰年と言うことで、「辰」にちなんだ生き物のお話を。

さすがに辰（竜）自体は想像上の生き物ですので、ボルネオでは見ることが出来ませんが、その子供（？）タツノオトシゴ（竜落子）がサラワクの海の中にたくさん棲んでいます。

ボルネオは森（と言うよりジャングル）の豊かな土地。その豊かな森は、豊富な栄養を産みだし、曲がりくねった緩やかな川の流がその栄養分をたっぷりと海へ運んでくれます。その森由来の栄養分が、沢山のプランクトンや海藻を育み、海の中の生き物を支える礎となっていきます。そのおかげで、ボルネオの海は生き物たちが太平洋の中でも最も多い場所の一つとなり、市場や海鮮料理屋に行くたびにびっくりするくらい海の幸が並んでいるのです。さらには、

貴重なアマモと呼ばれる海草が岸沿いの浅瀬にはびっしりと生え、世界でも希少なジュゴンなども育んでくれるのです。そんなアマモの茂みの中に棲んでいるのが竜の子供と言われるタツノオトシゴです。

ゴツゴツした体とトゲトゲのその姿はまさに竜のよう。竜が落ちていった子供とは良く言ったものです。その姿は海草の多い海の中で隠れるのにはもってこい、見事な擬態をしているのです。そしてこの魚（れっきとした魚です！）の一番の特徴は子供を産む事。ぶっくりと膨らんだお腹は子供を持っている証拠。このお腹の中から小さな赤ちゃんが沢山産まれてくるのです。そのため、安産や多産のお守りとされ、日本でも珍重されているのです。ところが、この子どもを産んでいるのはお父さん。メスが産んだ卵をオスが持っている保育嚢と呼ばれる袋の中に大切にしまい込み、お父さんが子育てをしながら、守り続けるのです。魚の世界では意外にも子育て



オオウミウマ

はお父さんの仕事だったりするのですね。アマモの森が広がるサラワクの海の中でも、特に広大なアマモ場が広がるミリでは、このタツノオトシゴが町の象徴になっています。ミリの町に行ってみると、このタツノオトシゴをモチーフにしたモニュメントや様々なデザインの町飾りを見ることが出来て、サラワクの町並探訪の楽しみとなっています。2012年はタツノオトシゴのように、沢山の幸が産まれる年になることを願っています。

Jalan Jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

2月20日からボルネオで恒例のワークキャンプがはじまります。詳しくはホームページをご覧ください。

## ACEに入会のお誘い

## 編集後記

### \*この会(ACE)は・・・?

アジア地域福祉と交流の会 (ACE) は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナンのMCSとサラワクのMCSの活動を支援しています。

### \*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 1.5万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

### \*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFacか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、TEL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

震災津波や原発事故で被災された方々は、未だ、通常の生活に戻っていない人々が多いと聞きます。新しい年が希望に向かえる年でありますよう。且、11月福島の折り紅葉がきれいで感動。ほんとに日本の四季は素晴らしい。高校時代のクラス会にも感懐。

同窓会 47年振り返る 語り合う友 みな愛おしき  
人生の醍醐味は歳を重ねる程に味わえるものだと思う。

(Kunro)

2005年5月に本紙前身の"Duri Pinang"を発刊し、2009年1月、24号が発刊号となった。年3回発行だから、丁度8年続いたことになる。"Duri Kuching"が、今号で24号になった。感慨深い。次号から、新しい世界に踏み込むようなドキドキ感がある。今号、ベナンで知り合い現在はブルネイ在住の大石さんと、ベナンで家庭を持った福島県出身の田中麻代さんに書いて頂いた。長いお付き合いの方々には、ベナンにも他州、他国、日本にも沢山居る。有り難いことです。みんなにとって良い年でありますよう。(Ken)